才ノ峪古墳群

津山市埋蔵文化財発掘調査報告第23集

1988

津山市教育委員会

才ノ峪古墳群

津山市埋蔵文化財発掘調査報告第23集

1988

津山市教育委員会

序

津山市は、岡山県北部吉井川中流域に開けた山間盆地に位置し、和同６年(713)に備前国より分国された美作国の中心的位置を占めてきました。

近世には、森忠政により鶴山城が築かれ城下町として形成された市街地は、今も各所に当時の面影を色濃く残し、落ち着いた雰囲気を保っています。

しかし、津山も全国の例にもれず、高度成長期いらい市街地周辺部での開発行為が頻発し、十数年前には想像もつかなかったほど周辺部の景観は一変しております。

盆地地形を呈する津山の場合、こういった開発行為の頻発する市街地周辺部には、弥生時代以降の集落遺跡、古墳群等の遺跡が数多く残されており、年々これ等開発行為に伴う埋蔵文化財の保護問題が大きな課題となってきております。

津山市では、こういった事態に対処するため昭和60年に文化課を創設し、専門職員を増員するなど保護体制の強化に勤めておりますが、押し寄せてくる開発の波の前にはまだまだ保護体制不充分の感は否めません。

才ノ峪古墳群の調査も、こういった開発行為に伴う事前の緊急調査でありました。才ノ峪古墳群については、昭和59年度にゴルフ練習場造成工事にともない２号墳を調査しており、今回調査した１、３号墳はそのさい事業者と現状保存で合意していたものであります。あらためて保存箇所を調査したのは、練習場開設後同部分の存在が、練習事故の原因となっており、運営上重大な支障があるとの事業者からの主張に沿ったからであります。

今回の調査により、６世紀初頭の小古墳群全体の概要があきらかとなり、初期群集墳の存在様式を示す、一基準資料となりました。

調査についても、報告書についても種々の不備が存在することと思われますが、今後一層保護体制の充実強化を図りたいと存じますので、諸賢の御叱正をお願いするとともに、本報告書がいくぶんなりとも活用されますことを念じます。

末筆ながら、今回の調査にも御援助、御協力いただいた事業者北奥勉氏はじめ、文化庁、岡山県教育委員会文化課他の諸機関、考古学研究者の皆様、地元協力者の皆様に厚く御礼申し上げます。

昭和63年３月31日

津山市教育委員会
教育長　福　島　祐　一

例　　言

1．本書は、昭和61年11月６日から昭和61年１月29日まで津山市教育委員会が実施した、ゴルフ練習場造成工事に伴う才ノ峪１、２号墳の発掘調査報告書である。

才ノ峪２、５号墳については昭和59年度に津山市教育委員会が発掘調査を実施しており、この調査の報告書は昭和60年に「才ノ峪遺跡」として津山市教育委員会から刊行されている。

古墳群所在地は、岡山県津山市楢字才ノ峪335－1番地他である。なお、古墳群名は地積図による小字名からとったもので、地元では該当地をサイノサコと発音している。

2．発掘調査に要した諸経費は、基本的には国庫補助金をえて津山市費で対応したが、事業者北奥勉氏から現物共与をうけた他、種々協力を得た。また、調査報告書印刷費については、北奥勉氏の負担と津山市費をあてた。

3．本書の編集と執筆は、津山市教育委員会文化課職員中山俊紀がおこなった。

4．遺構、遺物の実測、製図は、中山がおこなった。

5．本書に使用したレベル高は、すべて海抜絶対高である。また、方位は磁針方位を用いた。なお、磁針方位は西偏約６°40′である。

6．出土遺物、実測図面等は、津山市教育委員会二宮埋蔵文化財整理事務所に保管している。

本　文　目　次

第１章　はじめに　　頁

１．発掘調査にいたる経過……1

２．遺跡の立地と環境……2

第２章　発掘調査の概要

１．発掘調査の経過……6

２．発掘調査の概要……6

第３意　遺構及び遺物

１．１号墳……9

２．３号墳……12

３．箱式石棺……15

４．出土遺物

（１）須恵器……16

（２）埴輪……18

（３）小玉……20

第４章　概　括

１．各古墳の築造時期について……21

２．埴輪と副葬品……21

３．才ノ峪古墳群の構造……23

挿　図　目　次

Fig. 1．才ノ峪古墳群位置図…… 1

Fig. 2．才ノ峪古墳群周辺の主要古墳分布図（縮尺１：25,000）
国土地理院発行２万5000分の１地形図「津山東部」及び「楢」…… 3

Fig. 3．才ノ峪古墳群周辺地形図（縮尺１：4,000）…… 4

Fig. 4．才ノ峪古墳群分布図（調査前、縮尺１：300）…… 7

Fig. 5．才ノ峪１、３号墳実測図（調査後、縮尺１：200）…… 8

Fig. 6．才ノ峪１号墳平、断面図（縮尺１：100）…… 10

Fig. 7．才ノ峪１号墳石室平、断面図（縮尺１：40）…… 11

Fig. 8．才ノ峪３号墳平、断面図（縮尺１：100）…… 13

Fig. 9．才ノ峪３号墳石室平、断面図（縮尺１：40）…… 14

Fig. 10．才ノ峪３号墳外箱式石棺平、断面図（縮尺130）…… 15

Fig. 11．才ノ峪古墳群出土須恵器（縮尺１：３）…… 17

Fig. 12．才ノ峪古墳群出土埴輪１（縮尺１：４）…… 19

Fig. 13．才ノ峪古墳群出土埴輪２（縮尺１：４）…… 20

Fig. 14．才ノ峪古墳群出土小玉（縮尺１：１）…… 20

Fig. 15．才ノ峪古墳群及び北山古墳群出土須恵器蓋杯（縮尺１：４）… 22

表　目　次

表１．才ノ峪古墳群一覧表…… 7

写　真　図　版　目　次

PL. 1．１．才ノ峪古墳群遠景　２．発掘調査着手前の状況　３．重機による造成土除去作業　４．１、３号墳旧状復帰

PL. 2．１．１号墳　２．１号墳主体石室遺存状況　３．須恵器出土状況(1)　４．須恵器出土状況(2)　５．埴輪出土状況　６．主体石室側壁基底部配列状況　７．１号墳調査終了

PL. 3．１．３号墳　２．３号墳主体石室遺存状況　３．石室(1)　４．石室(2)

PL. 4．１．３号墳石室側壁　２．石室部上層切断面　３．墳丘切断面　４．構築状況　５．主体石室側壁基底部配列状況　６．３号墳調査終了

PL. 5．１．３号墳箱式石棺検出状況　２．箱式石棺天井石除去後　３．箱式石棺掘り方

PL. 6．出土須恵器及び小玉

PL. 7．１号墳出土の埴輪

第1章　はじめに

1．発掘調査にいたる経過

才ノ峪古墳群は、津山市楢字才ノ峪335－1番地他に所在したもので、昭和59年同地一帯がゴルフ練習場として造成される計画が持ち上がった際、津山市教育委員会が現地調査を実施し3基の小円墳（1、2、3号墳）の存在をはじめて確認したものである。

ゴルフ練習場造成工事に際しては、事業者とその取扱について事前協議。1、3号墳については練習場内に原状保存することとし、2号墳については工事計画上破壊が避け難いものとされたので、津山市教育委員会が事業者の協力を得て緊急発掘調査を実施した。

昭和59年8月～10月に実施した2号墳調査の結果、さらに同墳北側で古墳の存在を示す不整円形の周溝一基が発見され、本古墳群が少なくとも計4基の小円墳で構成されていたことが判明した。

また、2号墳下からは弥生時代後期の長方形の台状墓が発見された。（『才ノ峪遺跡』1985津山市教育委員会）

ゴルフ練習場開設後、1、3号墳は、練習場敷地最高所に盛土保存されてきたが、この部分は急斜面をなしており練習場として機能上きわめて不都合であり、かつ練習者に危険が生じるとして、同練習場経営者から古墳撤去を求める強い要請が再三津山市教育委員会にもたらされた。

Fig. 1　才ノ峪古墳群位置図（▼印、才ノ峪古墳群）

このため、昭和61年9月同経営者とさらにその取扱について協議を重ねたが保存困難と判断されたため岡山県教育委員会に状況報告、文化庁の緊急調査補助金を得て津山市教育委員会が発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は、昭和61年11月1日～昭和62年1月29日に実施した。調査面積は、390㎡である。

発掘調査の組織は次のとおりである。

調査主体者　津山市教育委員会　教育長　福島祐一
調査担当　津山市教育委員会　文化課　中山俊紀
調査作業員　井口愛子　井口省三　神田亮　甲田勝子　甲田初江　甲田幹男
遺物整理　中山俊紀　赤松百合子

2．遺跡の立地と環境

才ノ峪古墳群の所在する津山市は、岡山県北部吉井川中流域の津山盆地中央部に位置し、北方には中国山脈の山並みが連なり、南方には吉備高原が広がる。

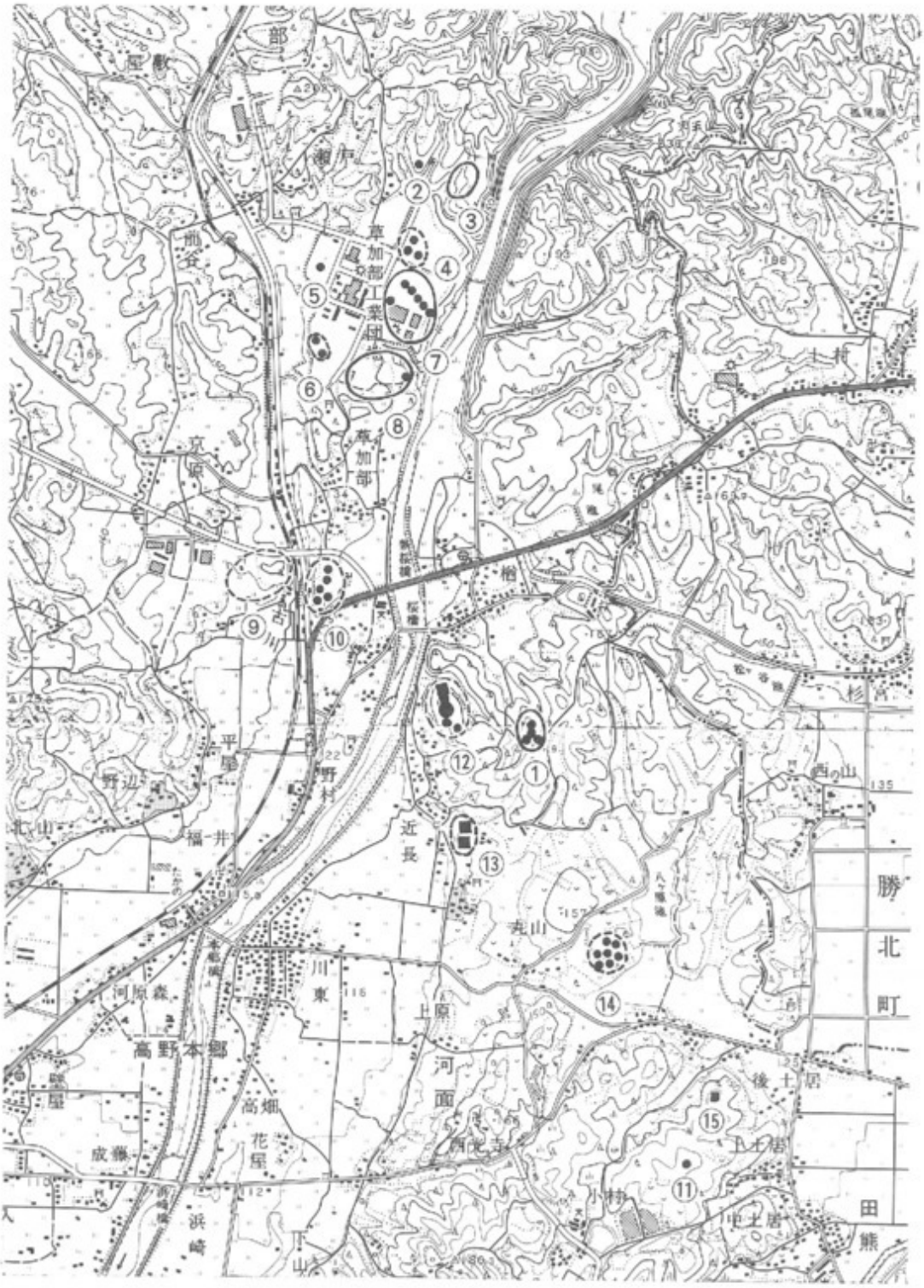
地理的には、津山盆地とは東方作東町江見付近から、西方は落合町追分付近までの約40km、南北前述二大隆起帯に挟まれた10kmあまりの沈降帯をさす。盆地内には南北隆起帯から複雑に張り出した帯状の丘陵が小平地を区切り、各平地毎吉井川へと流れこむ大小支流が流れ、それぞれ大小可耕地帯を点在させている。

津山市橋は、北方中国山地に発し加茂町を通過して津山市に流れこみ吉井川に合流する吉井川最大の支流加茂川が、津山市三浦、綾部、草加部等の狭い谷部を通過し、高野の平野部に流れ込む変換点左岸に位置する。橋地区から南へ、近長、河面にかけ複雑に開析された一連の低丘陵が広がっているが、才ノ峪古墳群は、この丘陵最高所海抜175mの部分に存在し、北に橋の集落を見下ろすことができる。

同丘陵北西の尾根上には市指定史跡近長四ッ塚古墳群が存在する。近長四ッ塚古墳群は、全長約45mの前方後円墳の他、直径10～15mの円墳3基で構成される古墳群で、未調査のため詳細は不明であるが、前方後円墳で全長約45mという規模は津山市東域では高野山西の正仙塚（全長約56m）、日上の天王山古墳（全長約55m）に次ぐものである。

昭和48年岡山県教育委員会発行の『岡山県遺跡地図』第一分冊によると、本丘陵一帯に28基の古墳の存在が記されているが、詳細は不明で、このうち調査されたものは河面丸山2号墳のみである。この他同丘陵上に存在する古墳の主なものには、才ノ峪古墳群南方約800mの丘斜面に一辺20mほどの二基の方墳で構成される近長夫婦塚古墳群、南端部に大池ノ西古墳群などがある。また同丘陵上は各所で畑地造成が行われており、詳細は確認できていないが工事中古墳が出たという伝承がある。

加茂川を挟んだ北方綾部、草加部地区は、市浄水場、工業団地等の建設工事に先立ち比較的



1．才ノ峪古墳群
2．緑山A1号墳
3．緑山遺跡
4．築瀬古墳群
5．ニレノ木南古墳
6．丸尾古墳群
7．舟込遺跡
8．東蔵坊遺跡
9．狐塚古墳群
10．片山古墳群
11．愛宕神社古墳
12．近長四ッ塚古墳群
13．夫婦塚古墳群
14．大池ノ西古墳群
15．上土居古墳

Fig. 2　才ノ峪古墳群周辺の主要古墳分布図（縮尺1：25,000）
国土地理院発行2万5000分の1地形図「津山東部」及び「犠」

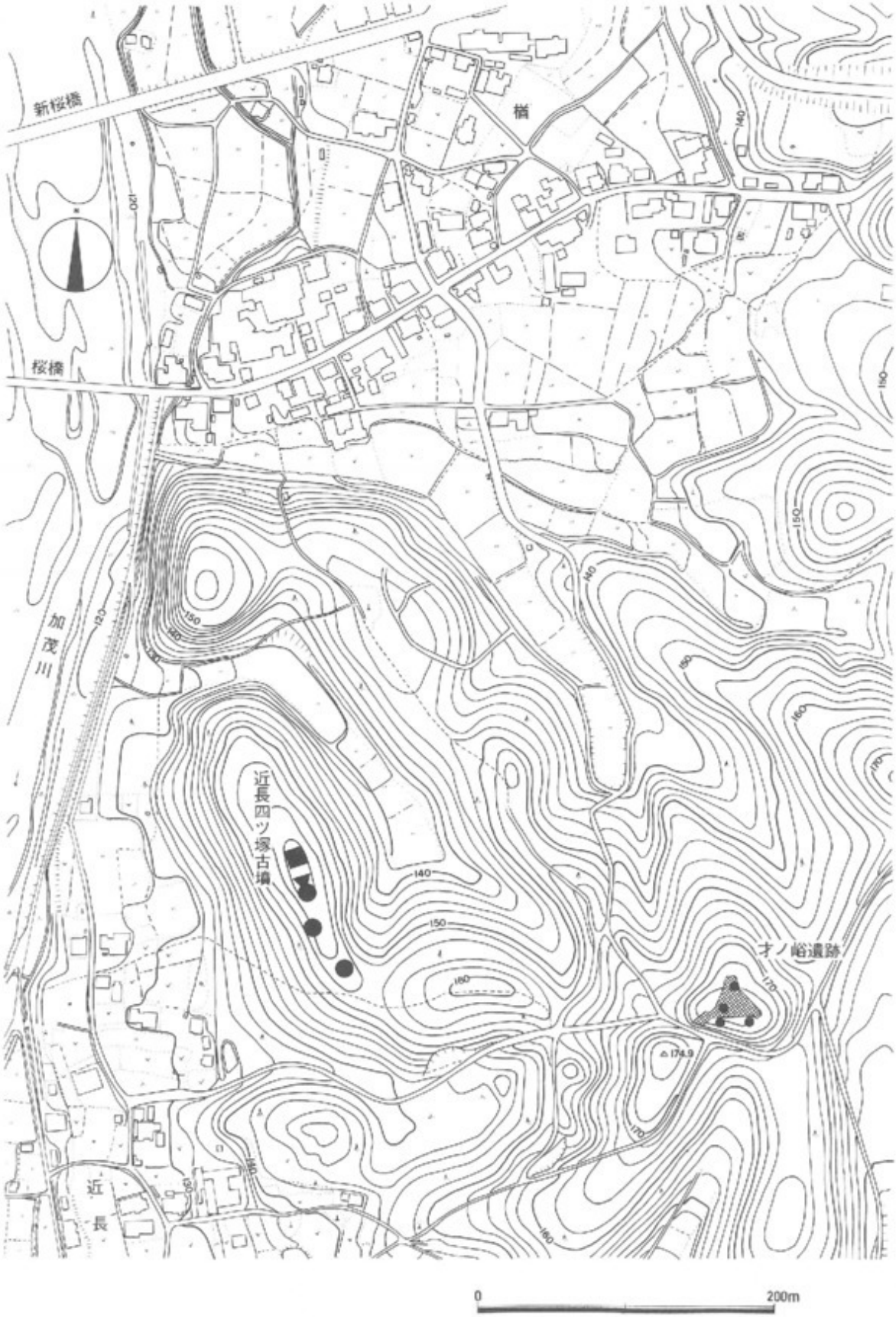


Fig. 3　オノ峪古墳群周辺地形図（縮尺1：4,000）

多くの遺跡が発掘調査されている。例えば、弥生時代～古墳時代後期の集落遺跡、東蔵坊遺跡[①]、弥生時代中期の集落遺跡鮒込遺跡[②]、古墳では鮒込古墳群[③]、築瀬古墳群[④]、ニレノ木南古墳、東蔵坊1号墳[⑤]、緑山A1号墳[⑥]などが調査されている。

このうち鮒込古墳群は、計5基の小円墳で構成され4基が調査されているが、2基は横穴式石室墳、2基は竪穴式石室墳で6世紀後葉から7世紀にかけてのものであった。また、築瀬古墳群は、6世紀後半の3基の円墳で構成され中心主体は、竪穴式石室ないしは箱式石棺、木棺直葬のもの2基、横穴式石室1基であり、周溝内で土壙墓、箱式石棺の発見されているものがある。いづれの古墳の周溝からも鉄滓が発見されており、化学分析結果によれば鉱石製錬滓とのことであり[⑦]、これら古墳群に確実に伴うものとすれば、初期鉄生産解明のための貴重な手掛かりとなるものである。

築瀬古墳群の東北方丘陵には6～7世紀の製鉄遺跡緑山遺跡が存在し、北方丘陵には7世紀前葉の横穴式石室墳羨道閉塞部に鉄滓を封入していた緑山A1号墳が存在した。

草加部丘陵南端部野村には、未調査であるが、片山古墳群、狐塚古墳群が知られている[⑧]。片山古墳群は、直径約25mで葺石をもつ円墳を含む5基の円墳で構成されており、狐塚古墳群は直径約20mで葺石、埴輪をともなう円墳をふくむ9基の円墳で構成されている。

(注)

① 安川豊史「東蔵坊遺跡B地区」津山市埋蔵文化財発掘調査報告第9集　津山市教育委員会　1981年
なお、A地区については浄水場建設工事にともない1971～72年に津山市教育委員会が調査。報告書未刊。

② 工業団地造成工事に伴い、1976～78年津山市教育委員会が調査。報告書未刊。

③ 同上

④ 行田裕美「築瀬古墳群」津山市埋蔵文化財発掘調査報告第13集　津山市教育委員会　1983年

⑤ 文献1

⑥ 中山俊紀「緑山遺跡」津山市埋蔵文化財発掘調査報告第19集　津山市教育委員会　1986年

⑦ 大沢正巳「築瀬古墳群出土鉄滓の調査」『築瀬古墳群』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第13集　1983年

⑧ 文献4

第２章　発掘調査の概要

１．経　　過

１、３号墳は、前回の調査後「現状保存」となっていたが、盛土を認めたため今調査時には墳丘上にゴルフ練習場の芝付けされた造成土がうづたかく盛り上げられていた。このため、調査はまずその造成土を重機によって取り除くことから始めなければならなかった。重機による造成土除去着手は1986年11月６日、後11月10日より人力によって古墳旧表土面の清掃にはいり実質調査に着手した。この結果、古墳そのものには造成による損傷はまったくないことが確かめられた。

各墳の調査は推定中心点から十文字に四区画に分け、この区画線に沿って幅30cmの試掘溝を掘り下げることから始めた。この結果両墳とも墳端線にあいまいな部分を残したものの、墳頂すれすれから竪穴式石室とみられる天井石を検出した。また、いずれの試掘溝からもこれら以外の埋葬施設は発見されなかった。試掘溝により周溝の状態も明らかとなったので、次に遺存墳丘を面として掘り下げるとともに、石室上面の清掃、平面図作成、天井石撤去、石室内掘り下げを図った。

前回の調査では、２号墳下から弥生時代の台状墓が発見されているのでその他の弥生遺構が存在している可能性もあり、古墳そのものの調査と並行して墳丘周及び南斜面の試掘をおこない、中世土器の散布をみたのでこの部分も最終的には全掘したが、古墳以外の遺構の発見はなかった。弥生土器は、３号墳北西部で若干数発見したが、いずれも前回調査の台状墓に伴ったものとみられ、前回出土土器と同一個体のものが含まれていた。

１、３号墳とも、調査終了後旧地表面まで掘り下げをはかり遺構検出につとめたが、この部分にも弥生遺構の発見はなかった。調査終了は87年１月29日である。

２．概　　要

前回及び今回の調査で才ノ峪古墳群として確認した古墳は円墳総数４基である。付近には削平を受けている場所、道路建設で切り取られている箇所などがあり未確認の古墳が存在していた可能性もあるが、いずれにしろ才ノ峪古墳群は少数の小古墳で構成されていたことはほぼ確かである。

出土土器からみた各墳の築造年代にはほとんど差がない。しかし、各墳の特徴を細かくみれば、１、３号墳主体はいずれも竪穴式石室とはいえ、１号墳のそれは箱式石棺とするほうが適切なほど小形かつ粗雑なもので、その他別表のように多様性をもっていることが注意される。

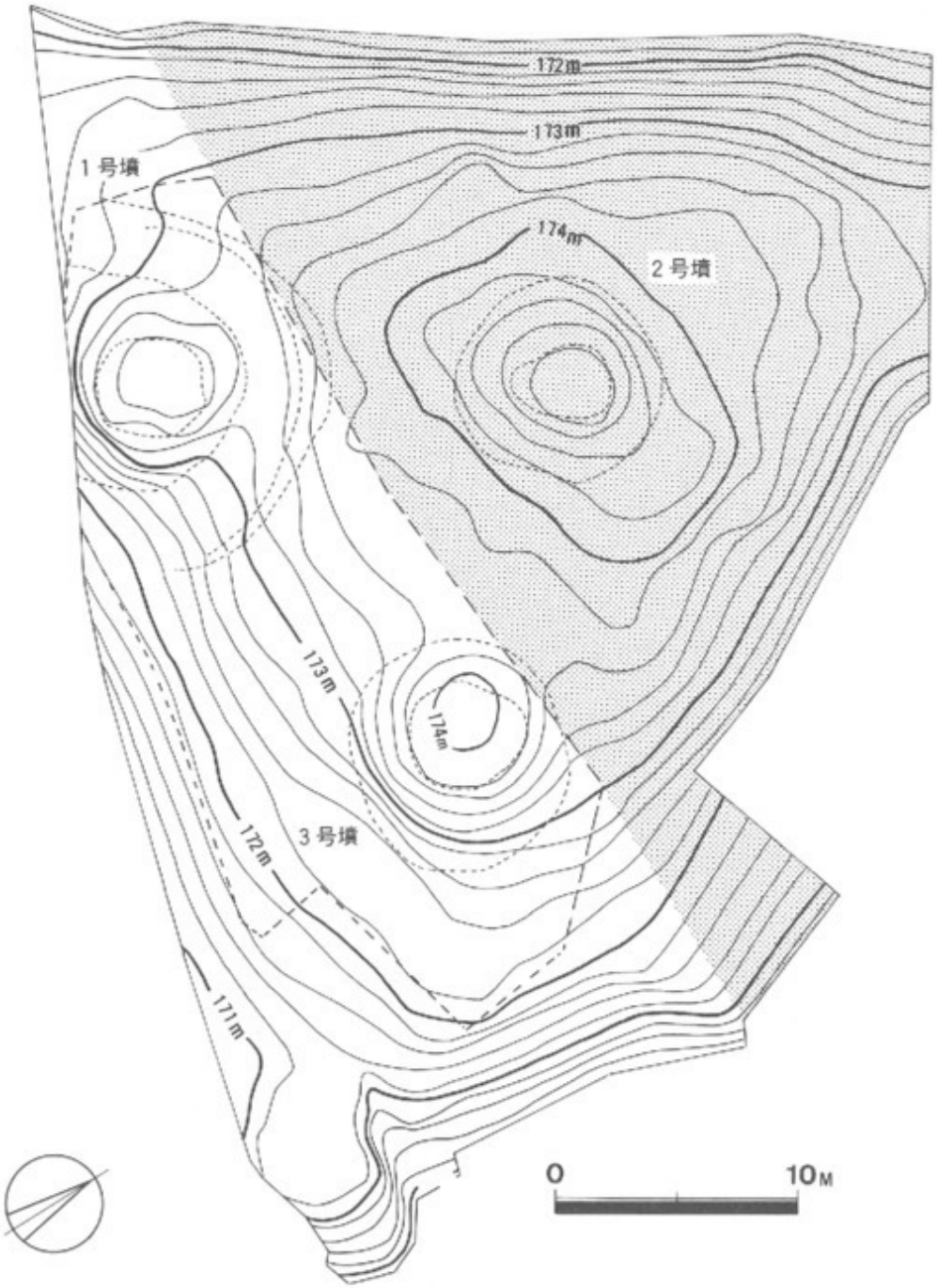


Fig. 4　才ノ峪古墳群分布図（調査前、アミ線は第1次調査部分、縮尺1：300）

名　称	規　模	中心埋葬	礫床	床石	副葬品	墳外埋葬	ハニワ	盗掘
1号墳	直径9m	竪穴式石室	有	有	須恵器	?	有	有
2号墳	直径6m	箱式石棺	無	有	小　玉 土師器	土壙墓	無	有
3号墳	直径9m	竪穴式石室	有	無	小　玉	箱式石棺	無	無
5号墳	直径5m	?	?	?	?	?	無?	?

表1　才ノ峪古墳群一覧表

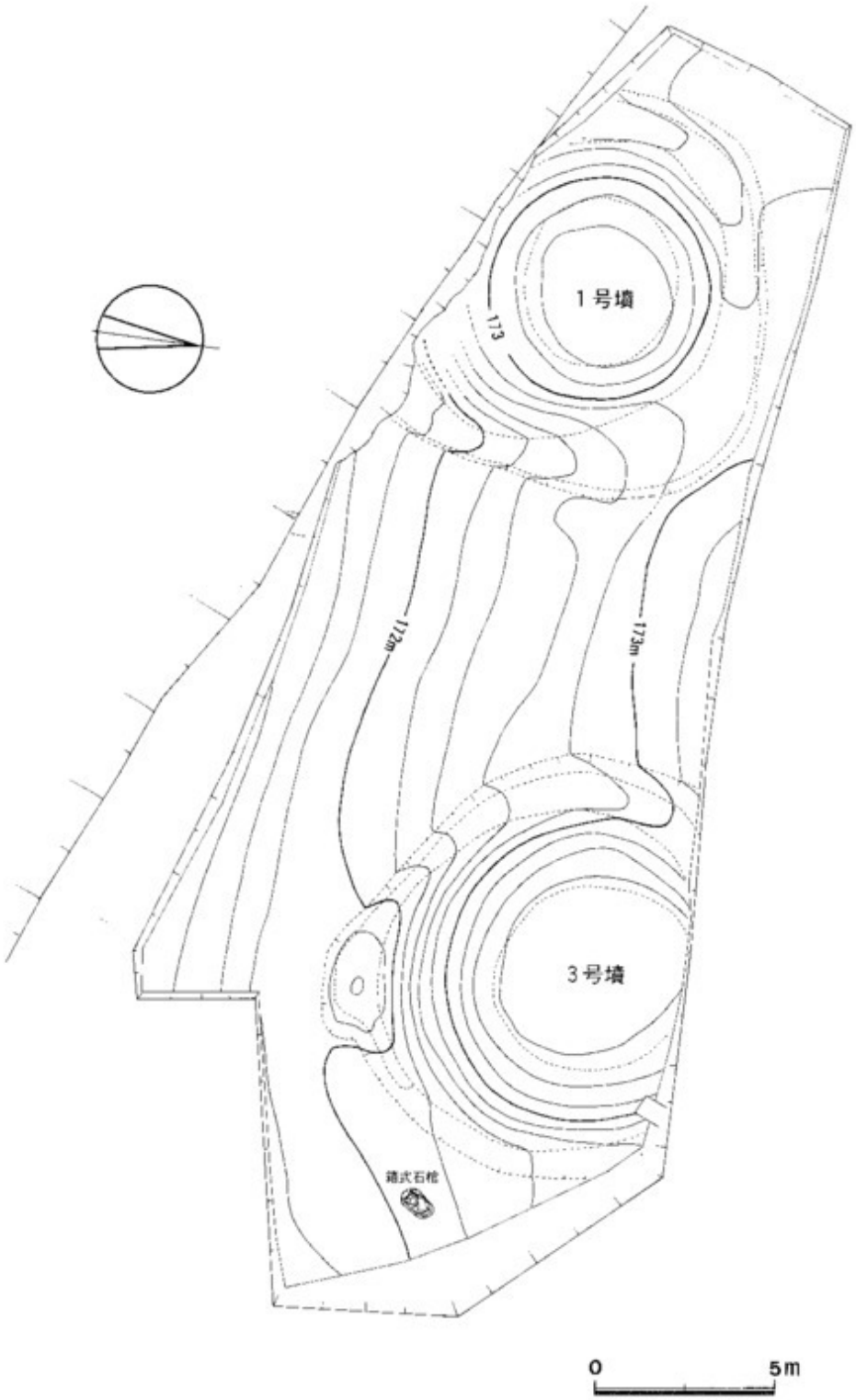


Fig. 5　才ノ峪1、3号墳実測図（調査後、縮尺1：200）

第３章　遺構及び遺物

１．１　号　墳

２号墳の位置していた丘頂部より南に伸びる尾根部やや傾斜面に位置する円墳で、基底部の比高差によるためであろう南北にやや長い楕円型を呈している。墳丘南端は切通道によって削り取られており、墳頂部は大きく盗掘の跡を残していた。墳丘規模は東西約８ｍ南北推定8.5ｍ程度であったと考えられる。墳頂平担部は直径約4.5ｍの不整円形を呈しかなり変形していることが考えられた。埋葬主体は竪穴式石室で、その位置から考えて本来南にもうすこし張り出していたものとみられる。

墳丘を取り巻き幅1.5～２ｍ、深さ20～30cmの周溝が巡り、周溝底の高さは斜面につれて南に下降する。従って古墳の遺存高は北側で60cm、南側で1.6ｍ程である。

墳丘盛土は、旧地表から最大80cm程を残しているが、盛土の中には大小の地山礫を多数含み古墳基底部整形時の掘削土をそのまま盛り上げたことが知られる。

竪穴式石室は東半を大きく破壊されていたが、内測で長辺約２ｍ、短辺35～40cm、深さ30cm程の小形かつ偏平なもので、石室基底部は旧地表まで達せず、石室は盛土中に築かれている。石室の構築法は、最下段に長楕円形の河原石を小口を内にむけ四周に巡らし石室の輪郭を整え二段目から用材の形状にあわせ基本的には横積みで小口積を併用し積み上げている。用材は河原石を基本としているが、部分的には天井石と同材の緑色片岩あるいは地山礫とみられる円礫も用いられていて、竪穴式石室としてはきわめて粗雑な印象をうける。また、規則性はみられないが、側壁裏手には地山礫が多く積み込まれていた。

いずれの側壁も石材四段程度で天井に達し、石室西端部には緑色片岩の偏平な割石三枚が天井石として横架されていた。また、石室床面にはウズラ卵大の円礫がまばらに敷かれ中央やや西よりに緑色片岩の板石が敷かれていた。

副葬品として、西端部で床面よりやや上位に須恵器、小形有蓋短頸壺、蓋付杯二セットが閉じられたままきちんと遺存していた。杯内面には内容物を推測させるものはまったく残存していなかったが、短頸壺内部には朱ないしはベンガラとみられる赤色顔料が付着していた。

これ以外、出土遺物としては円筒埴輪片及び朝顔型埴輪片とみられる埴輪片がコンテナ６箱分発見されている。いずれも小片に限られ、埴輪出土位置は墳端部崩土及び周溝内埋土中が大多数で本来の埴輪樹立位置を示すものは無かった。なお、墳頂の盗掘の際の攪乱堆積土中より埴輪細片20片ほどが発見されている。

石室内出土須恵器及び埴輪の年代観からして、本墳の築造は６世紀初頭とみられる。

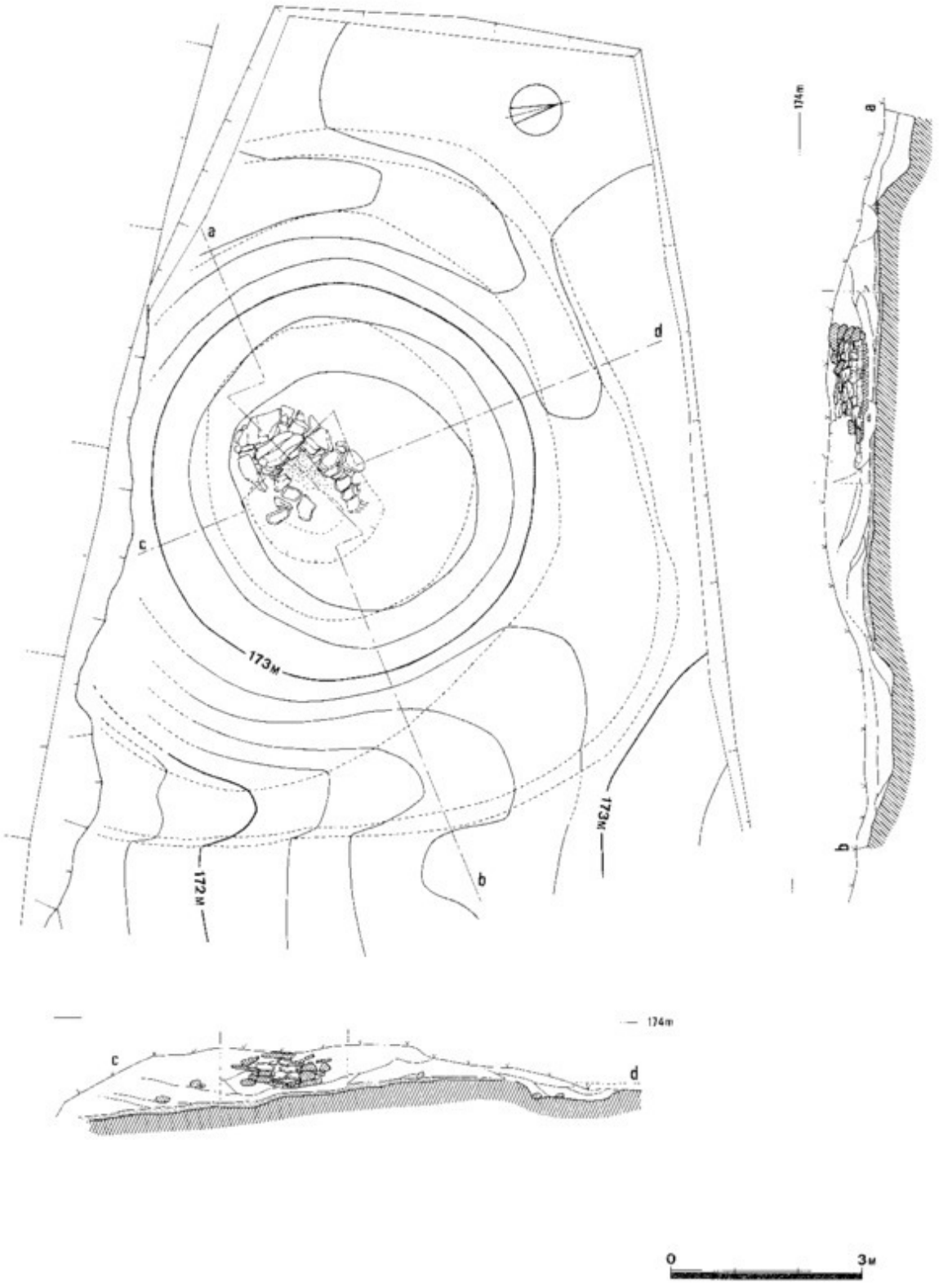


Fig. 6　オノ峪1号墳平、断面図（縮尺1：100）

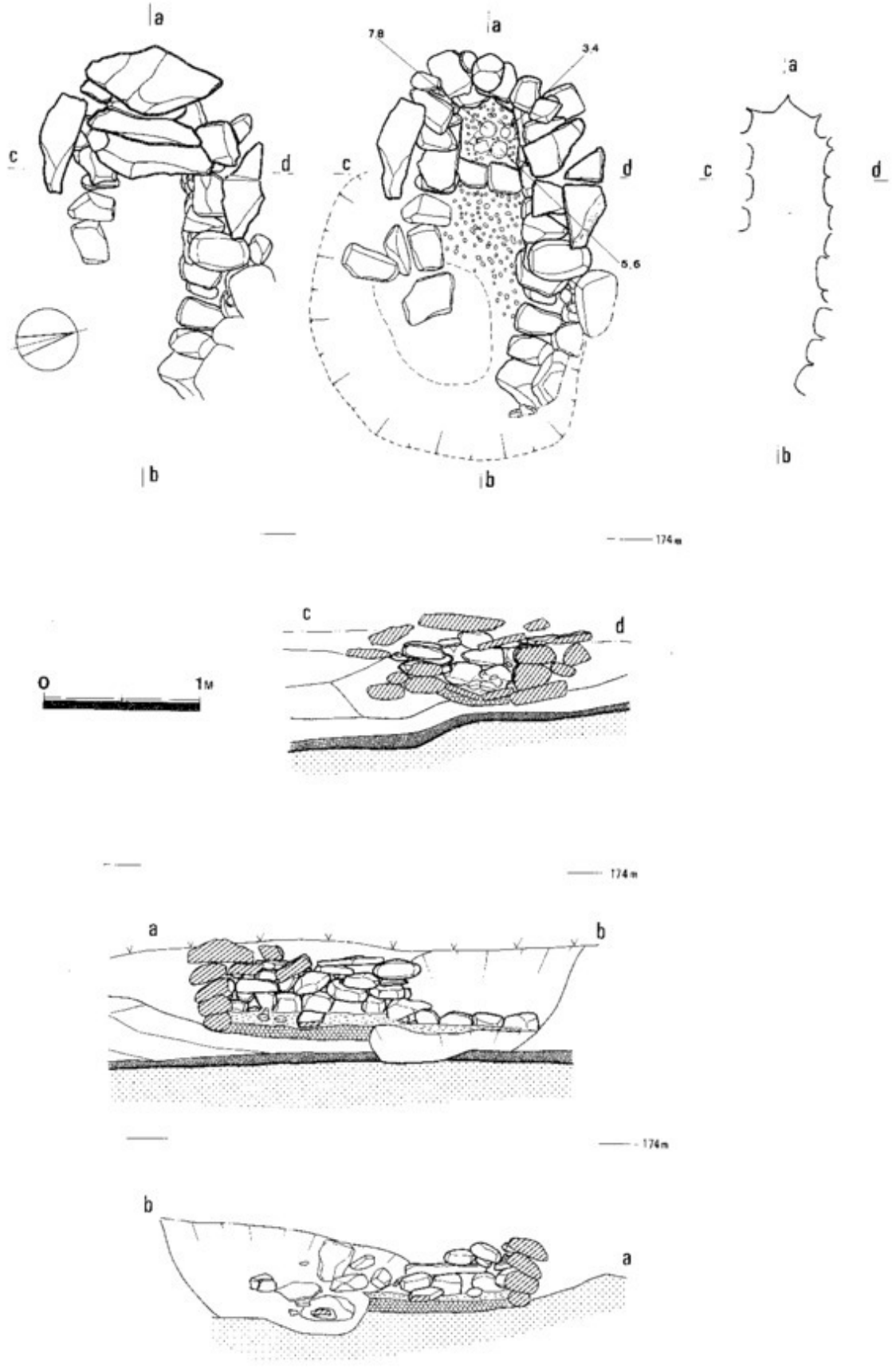


Fig. 7　才ノ峪1号墳石室平、断面図（縮尺1：40）

2．3　号　墳

2号墳の位置した丘陵頂部から東へ延びる小尾根、やや下位に位置する円墳である。盗掘痕跡も無く墳丘自体の遺存状態も極めて良好であった。墳丘直径は約9.5ｍで、墳端線はほぼ円形を呈している。斜面に位置しているため墳丘の高さは、北側と南側で相当な開きがあり北部分で約60cm、南部分で約２ｍある。このため、直径５ｍある円形の墳頂平坦部はその中心を北に大きくずらしている。

墳丘を取り巻き幅１～1.5ｍの周溝が存在し、南端部最下部では幅広い窪地を形成している。

全体整形は、丘陵を円錐台状に削りだしその掘削土をそのまま盛り上げて封土としているが、その盛土遺存最大部は60cm程ある。この盛土中には、１、２号墳ほど礫は多くないが、これは３号墳周辺部の地山に礫が少ないためで、それでも随所に人頭大の地山礫が含まれる。

墳頂中央部に、主軸を東西方向にとる竪穴式石室一基が築かれている。石室は天井石の東端の一枚が流出し、石室中央部の天井石が折れて石室内に陥没していた以外完全に残されていた。石室規模は、内測で長辺2.3ｍ、短辺60～70cmで床面から天井石までの高さはおおよそ70cmである。

石室構築石材は、河原石とみられる円礫を基本的には用いているが、最下段は地山礫とみられる長方体状の石材を横並べしかつ上面を一定の高さに揃えている。その上段には偏平な河原石二、三段を横置に重ねさらに上方には、これらより大ぶりの細長い石材を横一列に並べさらに上段は小口積みさらに横積を繰り返し壁面の脆弱さを安定させている。最上段は最も大きな石材を用い小口置きし、石室内面に大きくせりださせ上部口径を狭めて緑色片岩の板石を横架している。従って石室使用石材は上位ほど大型のものが用いられている。石室床面には、ウズラ卵大の小礫が厚さ10cm程一面に敷き詰められていた。

副葬遺物としては、床面中央部及び排土中からガラス小玉32点が発見された他は皆無である。その他、本墳に伴う遺物としては、須恵器34片が石室内部埋土中、石室上面及び墳丘斜面から発見されている。これらのうち大半は同一個体壺破片で、石室内部埋土中発見のものと石室上面のものは接合する。

南東部周溝外側で、箱式石棺一基が発見されている。共伴遺物はなく所属時期は明確ではないが２号墳周溝部で土壙墓が発見されており、築瀬２号墳でも同様土壙墓あるいは箱式石棺が発見されていて、これも３号墳にともなう付属埋葬とみていいだろう。このさらに南東部で須恵器杯一点が発見されている。

これら出土遺物から推定して、本墳の築造年代は６世紀初頭と見られる。

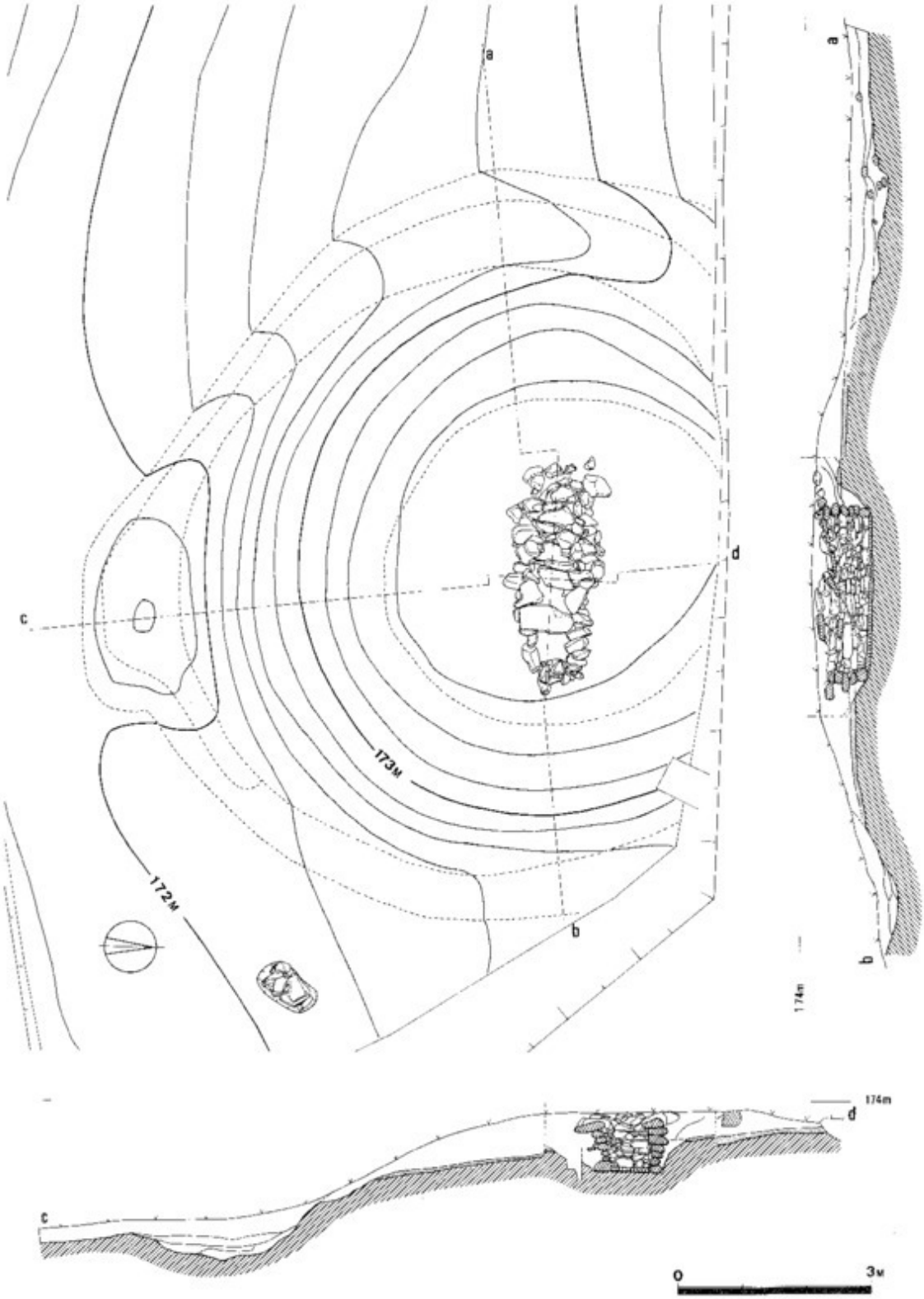


Fig. 8　才ノ峪3号墳平、断面図（縮尺1：100）

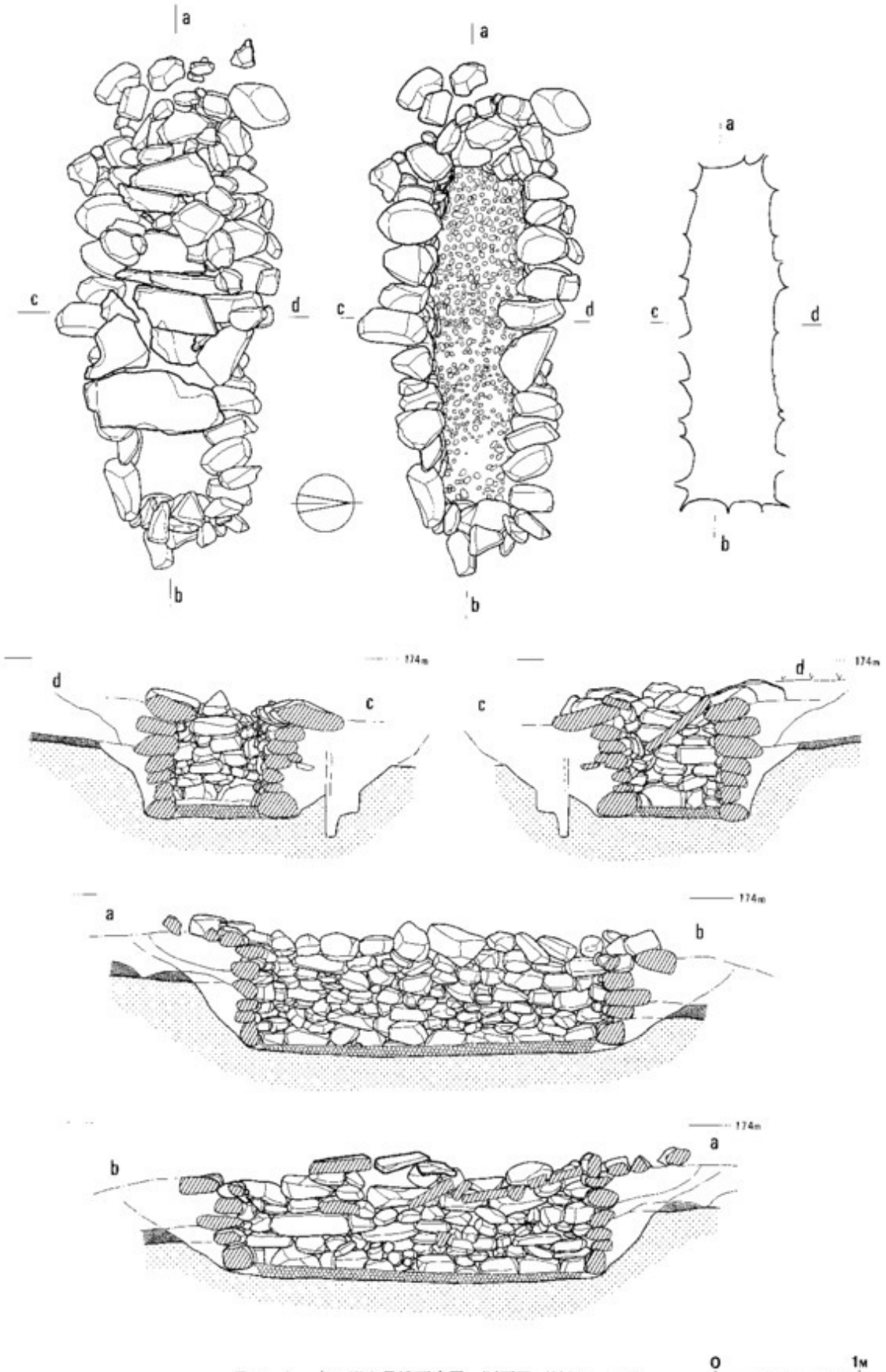


Fig. 9　オノ峪3号墳石室平、断面図（縮尺1：40）

3．箱式石棺

3号墳南東部周溝外方で発見された箱式石棺で、検出時に天井石一枚が露出していた。掘方規模は長辺約1ｍ、短辺約60cmで、深さ40cm程のきわめて小型の石棺である。掘方平面形は不整形の長方形を呈し、壁面はほぼ垂直に近い形で掘りこまれている。

棺用材はいずれも、1、3号墳天井用材として用いられていた緑色片岩板状石材で、天井石にはやや厚手のものが用いられている。

石材の設置は、床に板石を敷き並べたのち両長辺側の側石を立て並べている。この際、東の側壁石は掘方側面に密着して据え置かれ、西側石は石材が二重にあてられている。両短辺の石はいずれも床石の上にのり、北側のものは西側壁と同様、段をづらして上下二枚で仕切っている。

副葬品は皆無で、棺外にもこれに直接伴うとみられる遺物はなかった。従って、本箱式石棺の構築時期は明確ではないが、前項でのべたように3号墳の付属埋葬と考えてまず問題はないであろう。なお、本石棺南東3ｍで須恵器杯一点が単独で発見されており、発見位置から考えて本石棺にともなっていたものである可能性もある。

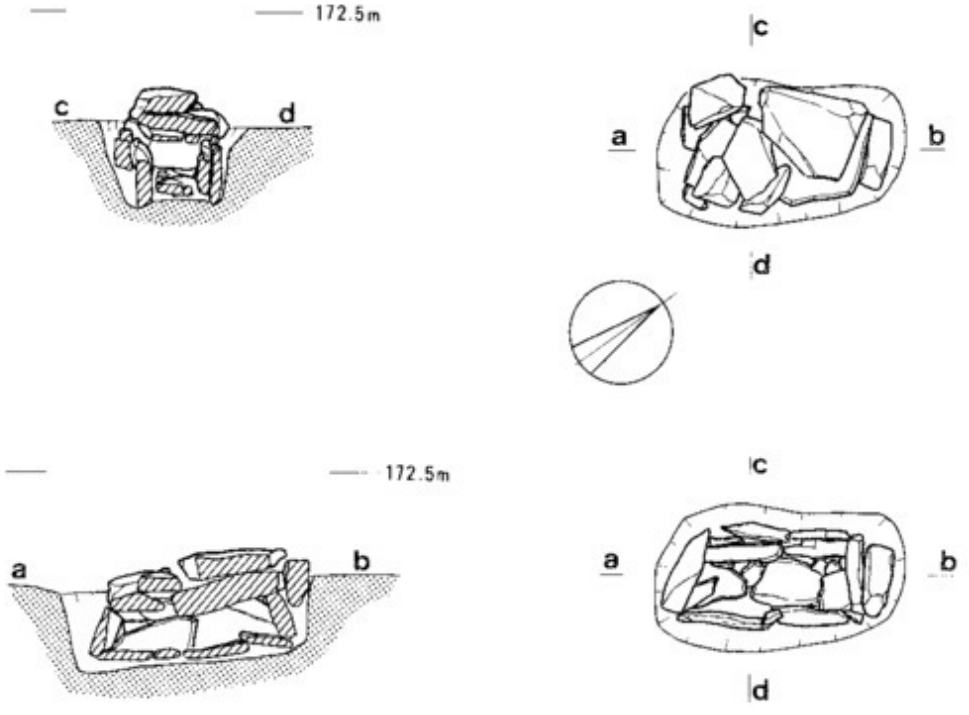


Fig. 10　才ノ峪3号墳外箱式石棺半、断面図（縮尺1：30）

4．出土遺物

（1）須恵器

須恵器は、1号墳主体部から杯蓋身セット2個体（fig. 11—5～8）、蓋付短頸壺1個体（fig. 11—3、4）が、また3号墳からは主体部石室上面及び内部に落ち込んで壺破片（fig. 11—1）墳丘表土から壺口縁部破片（fig. 11—2）、杯蓋とみられ小片1点、墳外箱式石棺から杯小片1点、箱式石棺東南部から杯身1点（fig. 11—9）が出土している。この内完形品は、fig. 11—3～9の7点である。

1は、壺形土器で接合復元資料。口縁部は7×3cmの破片で、直接胴部片には接合しない。胴部は、肩部から底部まで一応接合するが全体の6分の1程の破片しかなく歪がかなりあって全体形は不確実である。全体に淡灰色を呈し、口縁部のみ暗灰色を呈する。口縁部及び胴部上半は焼成堅緻であるが、下半部は軟質である。口縁部内外面はヨコナデ仕上、胴部外面は全面にタタキ目痕を残し、肩部から胴中位まではそのうえにヨコ方向のカキ目痕を残している。胴部内面及び外面下半はヨコナデ仕上で、内面にはあて具痕跡がかすかに残っているが、丁寧にナデ消されている。

2は、3×5cmの壺形土器口縁部破片。外面は暗灰色、内面は灰白色を呈し焼成堅緻。内外面ともヨコナデ仕上である。

3は、小形短頸壺蓋で内外面とも淡灰色を呈する。焼成堅緻。天井部は不定方向のヘラ削りで仕上げている他はヨコナデ仕上である。内面はヨコナデ仕上。内面に赤色顔料が一面に付着している。

4は3とセットの小形短頸壺。内外面とも淡灰色を呈する。焼成堅緻。内外面はヨコナデ仕上。外面屈曲部以下にカキ目痕が残る。内面に赤色顔料が付着。

5は、杯蓋。淡灰色を呈し焼成堅緻。天井部外面½程は回転ヘラ削り仕上。口縁部端の段は明瞭に残っている。

6は、杯身。暗灰色を呈し焼成堅緻。内外面ともヨコナデ仕上。底部外面は½程を丁寧に回転ヘラ削りで仕上げている。口縁部端の段はかすかに痕跡を残すのみである。

7は、杯蓋。内外面灰色を呈し、天井部はやや白っぽい。焼成堅緻。内外面ともヨコナデ仕上。天井部外面は⅔程を回転ヘラ削り仕上。屈曲部の稜、口縁部端の段は明瞭である。

8は、杯蓋。内外面灰色を呈す。焼成堅緻。内外面ともヨコナデ仕上。底部外面は½ほどを回転ヘラ削り仕上。口縁部端の段はほとんど認められない。

9は、杯身。外面灰色で、内面は灰褐色を呈する。焼成堅緻。内外面ともヨコナデ仕上。底部外面は½程を回転ヘラ削り仕上。口縁部端の段は、比較的明瞭に認められる。

いずれも、想定されるロクロ回転方向は時計回りである。それぞれの形態的特徴はほぼ同一

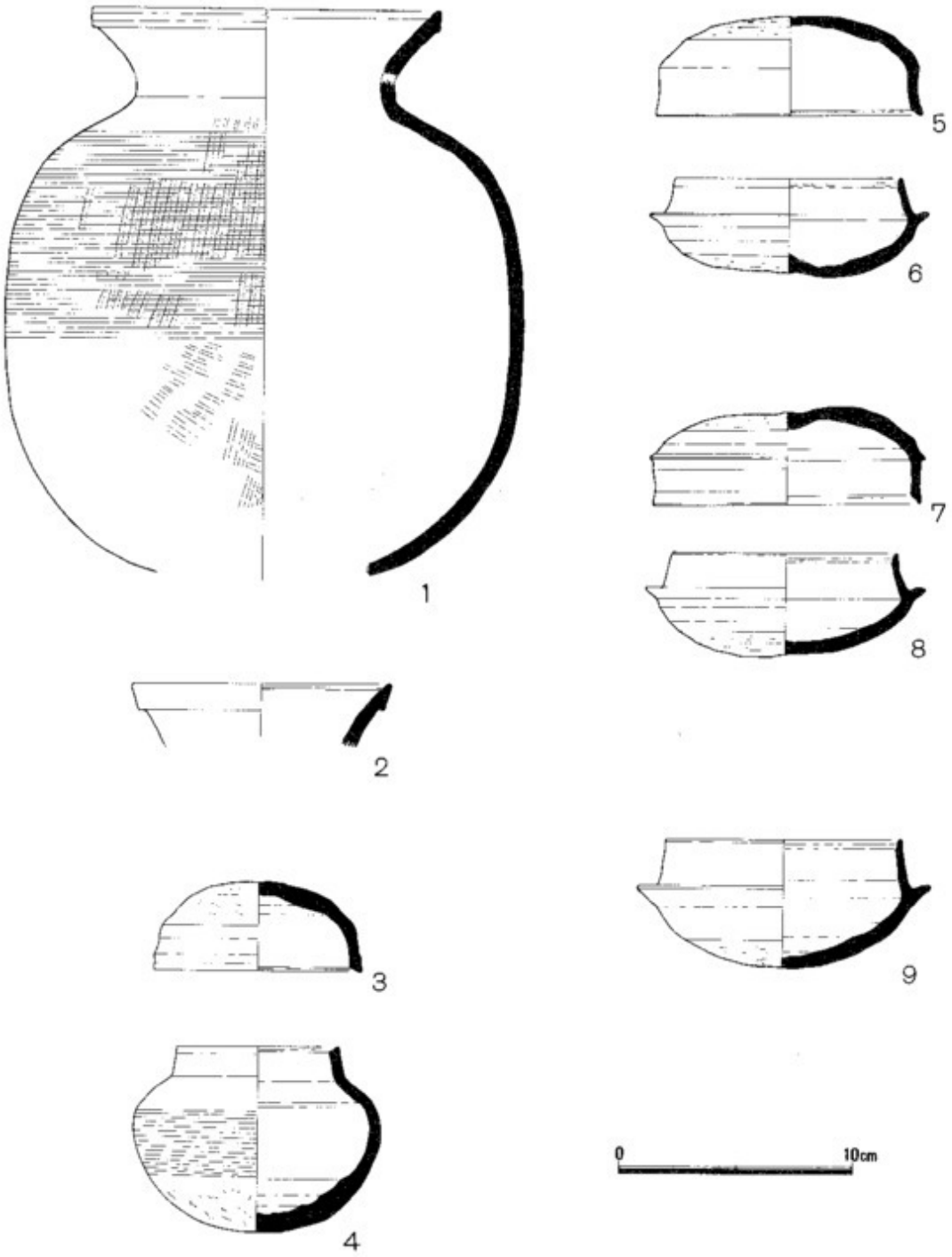


Fig. 11　出土須恵器（縮尺1：3）

時期の所産と考えられ、法量、形態からみて陶邑ＴＫ47に近い特徴をそなえている。それぞれ細部に相違が存在するものの、陶邑編年にあてはめれば、６世紀初頭のものと考えられよう。

（2）埴輪（Fig. 12、13）

1号墳出土埴輪には、円筒型埴輪の他、朝顔型円筒埴輪とみられる破片が存在する。大半は円筒型埴輪とみられ、内外面赤褐色を呈するものが多く、外面は赤色化粧土を塗布されたとみられるものが多い。黒斑はなく、須恵質のものも含まれる。

円筒型埴輪

円筒型埴輪で、その全形の明確に判明するものはない。13は、いずれも小破片に基づいて推定復元したもので、上半は須恵質、底部は土師質を呈する。上半はほぼ同一個体とみて誤りのないものであるが、底部は必ずしも同一個体とは判断できない。

外面調整は、タテハケ、ないしはナナメハケで全面調整しタガを巡らし、間帯をヨコハケによって仕上げている。タガはヨコナデで仕上げ、タガに対応する胴部内面には指頭圧痕を残すものが多い。透孔の位置および個数はいずれも明確ではないが、透孔の痕跡を残す破片はいずれも円形透孔の形状をとどめている。

口縁部外面にもヨコハケが及んでいるが、上半は一次調整のナナメハケを残し、端部はヨコナデで仕上げられている。底部外面は、二次調整のヨコハケが巡らず、一次調整のタテハケを残す個体と、平滑な板で叩きしめられたため一次調整のタテハケが消えているとみられる個体がある。底部端面にはヘラ切り痕跡をとどめるものがあるが、おおむねヨコナデにより丁寧に仕上げられている。内面は、ハケメ仕上げないしはハケ状条痕を残さぬヘラ状工具によりなであげられて仕上げられている。

タガは、幅2cmほどのきゃしゃな感じをうける押し潰れた断面M字形を呈する。最下段のタガのみやや幅広で偏平なものが存在する。

胴部外面に、先の丸い棒状工具または先の尖ったヘラ状工具により描かれた記号状の曲線のつけられた破片が存在する。（Fig. 12—9）

朝顔型円筒埴輪

いずれも細片で、明確に朝顔型埴輪とは認めにくいものであるが、外形からみて朝顔型埴輪と判断した。胴部片では円筒型埴輪と区別できないため、それぞれの占める割合は判明しないが、朝顔型埴輪の占める比率は高いとは見られない。

13は、口縁部片で薄手のつくりである。内外面暗赤褐色を呈し、いずれの面にもナナメのハケメ痕を残す。20、21は、口縁受部屈曲部と判断されるが小片で明確ではなく、21は特に肩部分のナナメハケメ方向が右上がりで他と異なり、上下逆転する可能性もある。20は、内外面の剥離激しく外面調整は明確ではない。接合法は、内面に粘土帯を押し当て引き伸ばしている。

破片の断面観察によっても粘土帯接合痕跡の明確なものはほとんど無いが、円筒型、朝顔型いずれの埴輪片の粘土帯接合方法も粘土帯下端を内側から張り当て引き伸ばすいわゆる内接法をとっているらしい。なお、埴輪片出土総量は、50×40cmのコンテナ約6箱である。

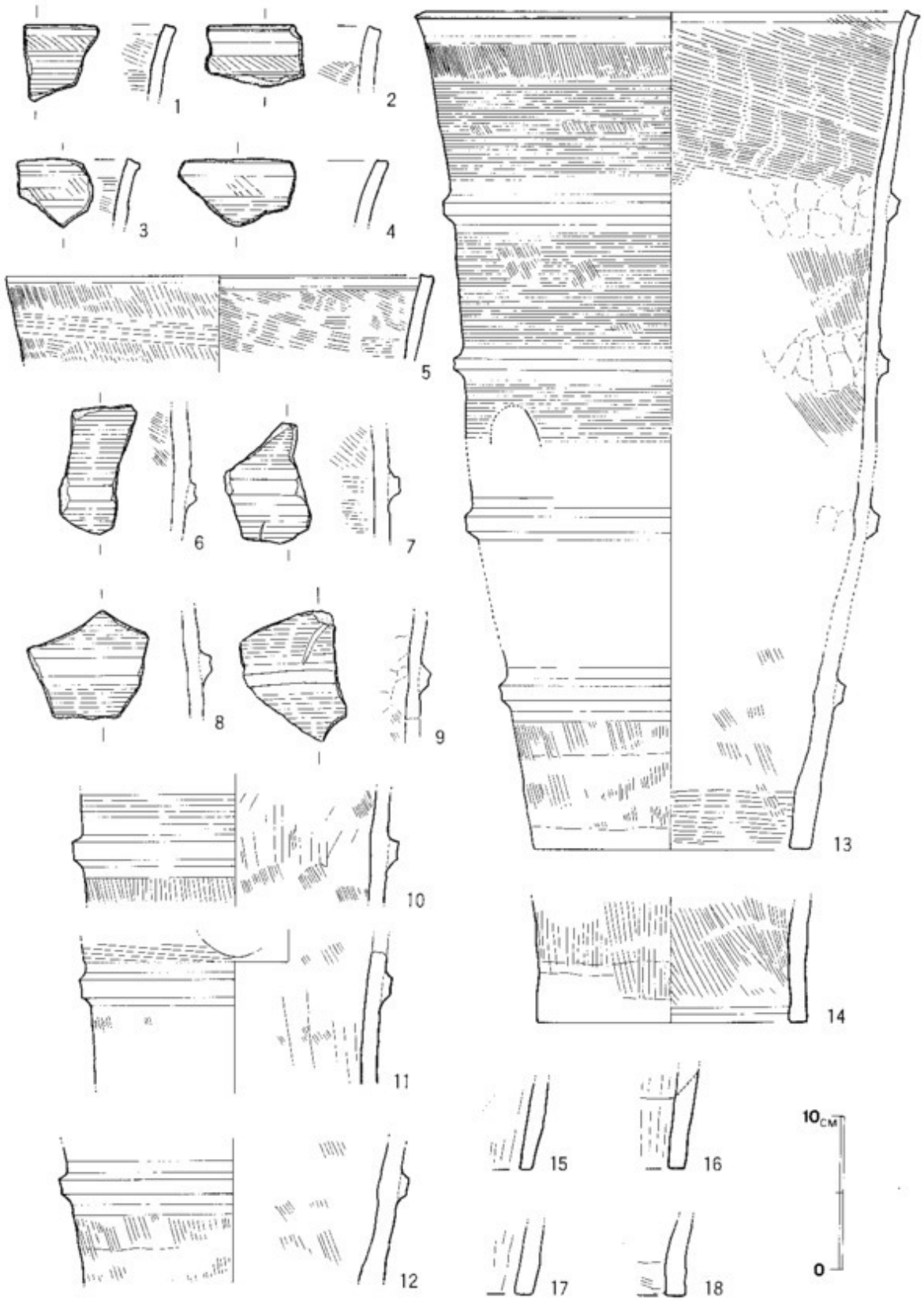


Fig. 12 出土埴輪1（縮尺1：4）

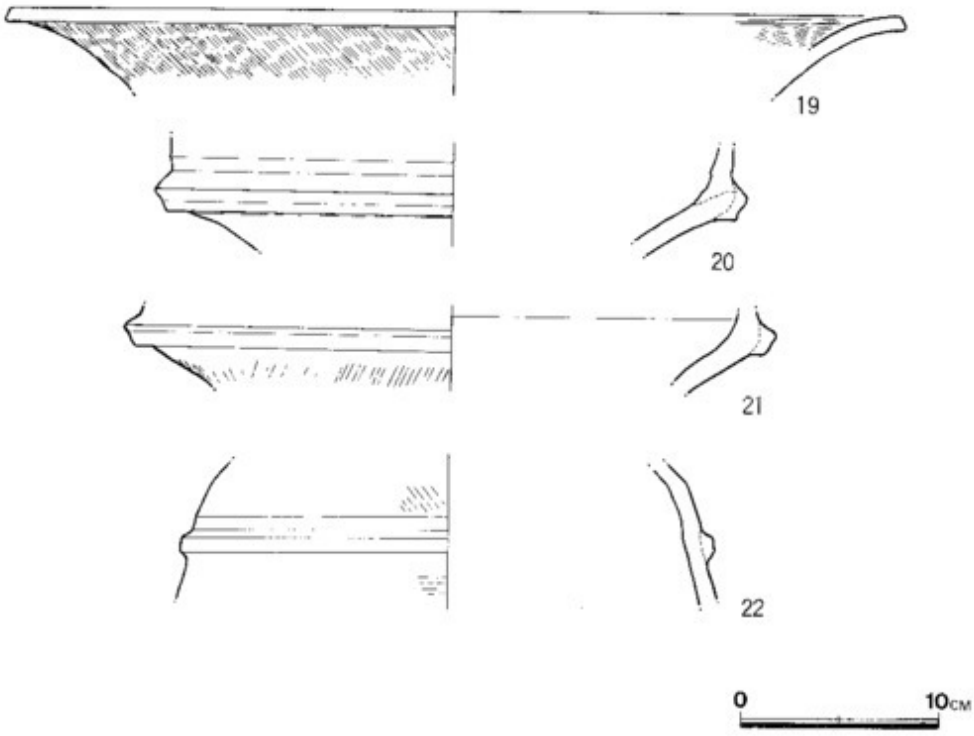


Fig. 13　出土埴輪２（縮尺１：４）

（3）小玉（Fig. 14）

すべてが、３号墳主体石室床面中央部から出土したもので、完形品計32個体、細片６片が発見された。いづれもガラス製小玉で、色彩は濃淡あるものの25一点以外青色で25のみ青緑色を呈する。

最大のもので６㎜×４㎜、最小のもので６㎜×2.5㎜である。

いづれにも、直径２㎜前後の穿孔が貫通している。

形態には、管状、丸玉状の二種が存在するが、大半には穿孔部面に切断痕を示すとみられる平滑な面を有し、細長い管状のガラス棒を細かく分割することによって製作されたものとみられる。

現地調査で、石室内埋土をさらに選別して小玉の発見につとめたが、現在までまだその排土について水洗いする機会がなかったため遺存総数は、若干多くなる可能性がある。

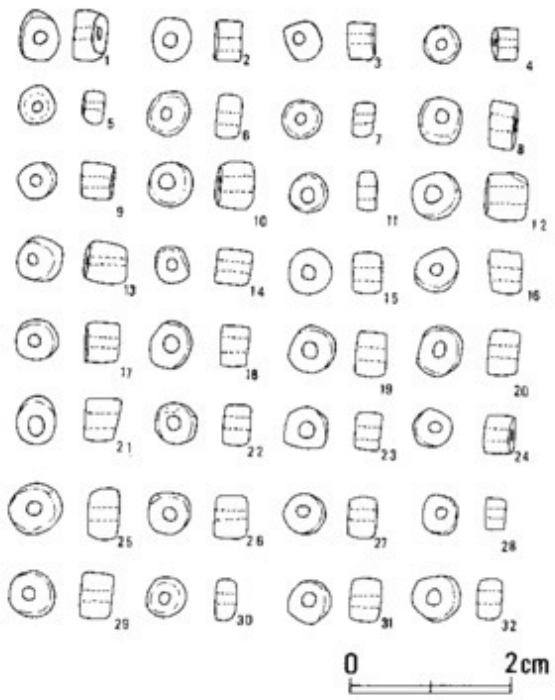


Fig. 14　３号墳石室出土小玉（縮尺１：１）

第4章　概　括

1．各古墳の築造時期について

昭和59年度に調査された才ノ峪2号墳の築造時期については、同報告書によれば周溝内埋葬出土の須恵器蓋杯に新古の二相の特徴を認め、古相に大阪府陶邑編年ＴＫ47、新相に同ＭＴ15との併行関係の存在を推測し6世紀初頭としている①。

1号墳主体に副葬されていた須恵器蓋杯2セットは、これらに比べると新相とされたものに法量、形態ともに類似し全体形態は丸みをもち兼中位の稜は不明瞭ないし痕跡となり、身受け部立ち上がりは高く立ち上がるものの端部の段は痕跡的な凹線状を呈するのみである。これらの事実は、全体として1号墳出土須恵器に2号墳出土のそれらよりもやや新しい位置付が与えられようが、前記の特徴を別にすれば、全体の形態、法量比較から大阪府陶邑編年②の中ではＴＫ47に最も類似しており、美作地方の須恵器編年が今だ手付かずである状況下では、これ等はおおむね同型式上の個体差と考えざるえず、いずれも6世紀初頭に築造されたものと推定される。

3号墳主体石室上面他出土須恵器蓋は、直接時期推定は困難であるが、3号墳に関連するとみられる杯身は2号墳の古い要素を持つとされた蓋杯と法量、器形が近似し、口縁立上がり部端の段がシャープさを欠くものの明確に認められ、段に関していえば2号墳と1号墳との中間的な形態を呈している。その点で2号墳よりはやや新しい傾向を持ち、1号墳よりやや古い傾向をもつといえるが、出土須恵器蓋杯の全体的特徴からみた各墳の築造時期は手掛かりのない5号墳を別として、ほぼ同一と考えられる。各墳の位置関係から築造序列を推定すると、この時期の古墳に尾根高所を選択的に占地しているものがみられるので、その原理で考えると、2号墳が当初築造され、3号、1号の順に造られた可能性が高い。

出土須恵器の微細な相違を僅かな時期差に置き換えるとすれば、この点で矛盾はない。

2．埴輪と副葬品

才ノ峪古墳群中では、1号墳一基のみに埴輪が伴っており、その他の古墳に埴輪が伴った痕跡はない。1号墳出土の埴輪は、円筒型埴輪及び朝顔型埴輪とみられる破片に限られるが、いずれにも黒斑は無く、須恵質の破片が含まれている。

各墳出土須恵器の形態的比較及び各墳の位置関係からみて、1号墳は最初に築造されたものとはみなしにくいことは前節で触れたとおりである。

ここでは、出土須恵器と埴輪の関係について若干の検討を加えたい。

埴輪の項で既に触れたように、1号墳出土円筒埴輪は外面胴部間帯に二次調整としての連続

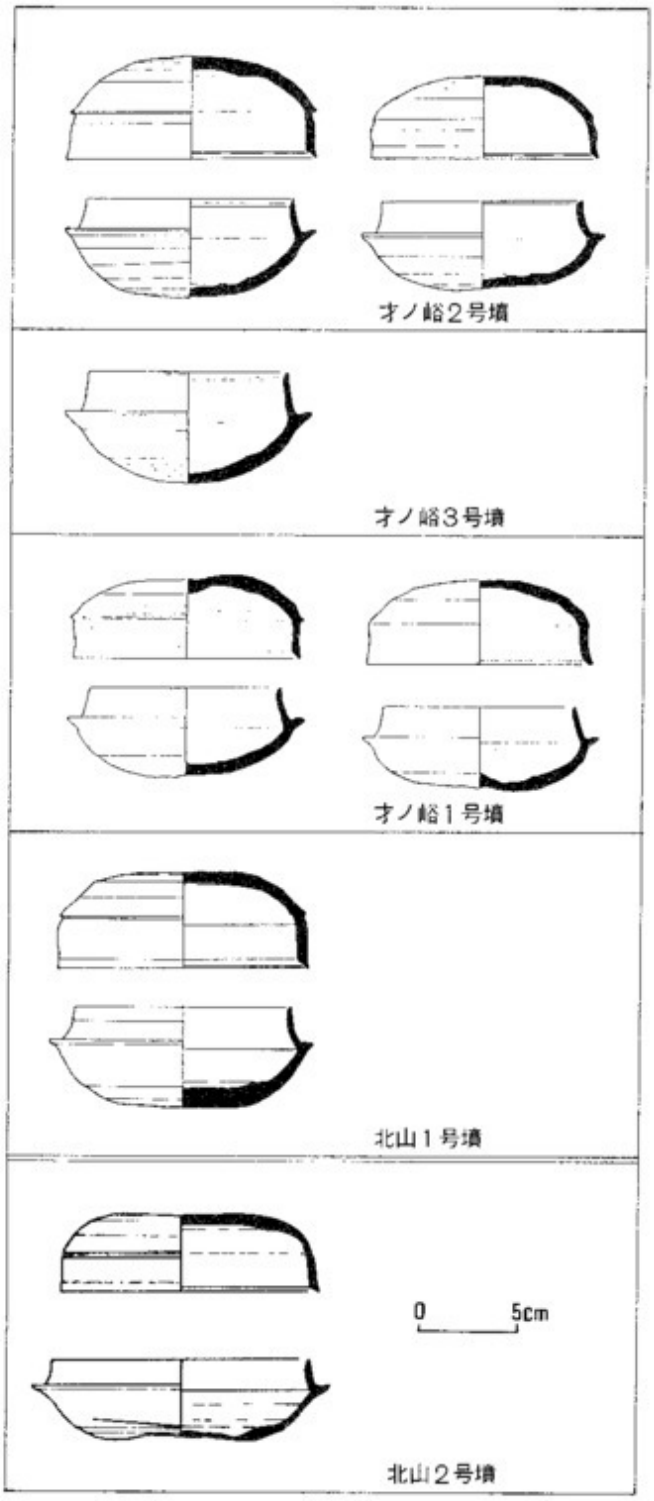


Fig. 15　オノ峪古墳群及び北山古墳群
出土須恵器蓋杯（縮尺1：4）

したヨコハケ（川西C種）を伴う破片が大半で、川西編年[3]に照らして第Ⅳ期の埴輪に属するものとみられる。しかし、この事実は川西編年での伴出須恵器の対応関係と照らして必ずしも一致するものではない。この点について、そのよってくる差の原因を推定するには当該期の円筒埴輪と須恵器の共伴例をこの地域で比較する必要があるが、美作地方ではその例はきわめて限定される。

美作地方ではその比較材料として、津山市日上畝山50、51、52号墳[4]出土のもの、日上和田1号墳[5]、中宮1号墳[6]、六ッ塚5号墳[7]、美作町北山1号墳[8]出土のものなどがある。

日上畝山50、51、52号墳の出土品については現在未整理で、各墳の埴輪及び須恵器にもそれぞれ数種が存在し、両者の対応関係は明確ではないが、少なくとも須恵質でC種ヨコハケを主体とする川西Ⅳ期の円筒埴輪が存在し、またⅤ期に属する二次調整をかく円筒埴輪が存在する。

美作町北山1号墳出土の円筒埴輪は、C種ヨコハケを胴部間帯に伴うものが見られるが、外面二次調整を欠くものが多く川西によりⅤ期に編年されている。また中宮1号墳、六ッ塚5号墳出土のものは、外面二次調整をかきⅤ期に編年されるものである。川西編年に沿って各墳出土埴輪に一応の序列をつけるとすれば、

歓山50、51、52号墳(古)⇒才ノ峪1号墳⇒北山1号墳⇒日上歓山50、51、52号墳(新)、日上和田1号墳、中宮1号墳、六ッ塚5号墳といった推移が推測される。

それぞれ共伴須恵器を、才ノ峪古墳群中でみられた蓋杯身口縁端の段消失といった観点で比較すると、陶邑TK23以前とみられる有蓋高杯、広口壺等をもつ歓山50、51、52号墳のものを最古として、才ノ峪1号墳⇒北山1号墳の推移が考えられる。才ノ峪1号墳、北山1号墳出土の蓋杯は、その特徴を除いては全体の器形、法量の点で陶邑TK47に近似するので、そのいずれも、しいて併行関係を求めるとすれば陶邑TK47ということになろう。

日上歓山50、51、52号墳(新)、日上和田1号墳、中宮1号墳には陶邑TK10以降とみられる須恵器が伴っており、これからみると埴輪の序列と須恵器のそれは一致する。また川西編年のⅣ期、Ⅴ期の境は美作では陶邑編年TK47併行期にあったことが推測できる。

才ノ峪古墳群のいまひとつの特色は、それぞれの古墳の副葬品の乏しいことである。発見された副葬品は、須恵器や土師器といった土器類以外硝子製の小玉少量である。もちろん、現在まで遺存しなかった品については知るよしもないし、3号墳以外中心埋葬主体が盗掘ないしは破壊されており完全な形で認識出来ないにしろ、鉄器類が存在した痕跡すら無かったのである。また、土器類にしろ各墳での発見数は少ない。相対的な副葬品の乏しさというのは、才ノ峪古墳群本来のありかたであったと考えられる。

ところが、それほど変わらぬ時期に築造されたとみられる北山古墳群ではこれとことなり大刀、鎌、鏃、鑿、刀子などの鉄製品が多量に出土しており、勾玉などの玉類、またこのほか馬具などが伴う古墳が存在した。

これら二者の相違は、古墳群の背景をなす集団の埋葬習俗ないしは習慣の相違に解消することはできず、相対的な集団の経済力ないしは社会的位置の差を反映したものと考えられる。このことはまた、才ノ峪2号墳においては通常従属的位置にあるとみられる周溝内埋葬に須恵器5個体が副葬されていたことにも表わされていると考えられよう。

3．才ノ峪古墳群の構造

才ノ峪古墳群のその特色を見極める上で、同様な存在形式をもつ古墳群との比較検討をおこなう必要があるが、才ノ峪古墳群周辺には発掘調査され内容の明確となった古墳群はない。

草加部地区には工業団地造成工事の実施にともなって発掘調査された鮒込古墳群、築瀬古墳群等があるが、いずれも横穴式石室墳を含む6世紀後半以降7世紀にかけて継起的に営まれた古墳群とみられ、才ノ峪古墳群と共時的比較の対象としては不適切である。

また、加茂川を挟んで対岸の丘陵上には、片山古墳群及び狐塚古墳群があって狐塚古墳群では、埴輪をもつ古墳が存在するといわれており、才ノ峪古墳群と比較検討する上で適切な例となる可能性もあるが、それらの実体はまったくの不明といわざるえず現状では検討のしようが

ない。

近辺に比較材料を求めると、中国縦貫自動車道建設に際して調査された英田郡美作町に存在した先の北山古墳群が、最も適切な報告例として検討の材料を提供している。

北山古墳群は、4基の古墳で構成され、1、2号墳は直径20m弱の比較的大形の円墳である。4、5号墳は10m程の円墳で、出土土器からみて1号墳が最も古くほぼ才ノ峪古墳群と接近した時期に築造されたとみられ、時期不明の4号墳を別に2、3号と新しい様相を示し、継起的に築造された可能性が考えられる。いずれも木棺直葬墳で、1、2号墳に埴輪が伴っていた。

北山古墳群は、才ノ峪古墳群と比較して全体として新しい要相が強いが、いまはそのことを置くとして、両者の古墳群としての違いは、北山古墳群が規模の点で格差をもつこと、継起的な要素をもつこと、木棺直葬と竪穴式石室をそれぞれが主体とすることなどである。

最大の類似点は、いずれも少数の小規模円墳群で、そのうち埴輪をもつ古墳の存在するということである。

埴輪が古墳祭式の主要な一面を担って発達してきたとすれば、それぞれの古墳群がもつ埴輪が象徴する被葬者集団の社会的性格に差は認めにくい。

それではこういった差、すなわち小群内の古墳規模の差のあるなし、埋葬様式の違いの背景は何に基くものであろうか。

埴輪をもつ北山1、2号墳の副葬品の内容を検討してみると、大刀、鉄鏃、馬具などの武具、鍬などの生産用具、装飾品、多量の須恵器などで構成されており、その内容は質量ともに豊富で5世紀代の「首長墳」と共通する要素が伺いしれ、それはまた横穴式石室墳の副葬品の構成にも通じるものがある。才ノ峪古墳群の副葬品のありようについては既に見たとおりである。

いわゆる群集墳は、副葬品の軍事、生産用具の序列の展開として位置付けられるものであり、またそういった序列が社会的編成の基幹となっていったことを示しているが、この点において北山古墳群が示す集団がそういった秩序編成のうえで先導的位置にあったことが推測出来る。

埴輪の存在が示す同様な小古墳群の古墳としての秩序とは別に、その内容の点で大きな格差の存在が社会的に重要な意味をもってきつつあることを、この二古墳群のありかたが示している可能性がある。

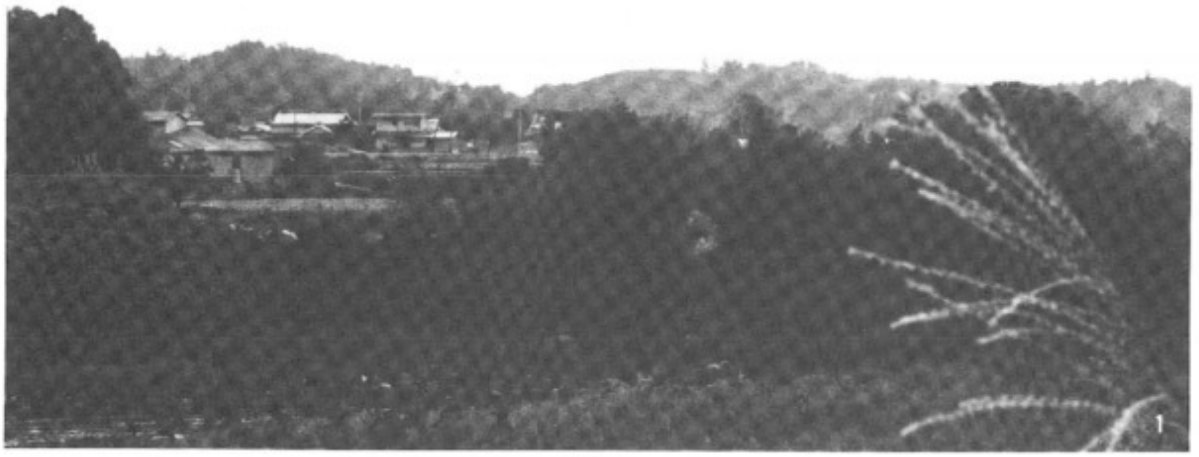
また北山古墳群では、いずれも箱形の木棺直葬という葬法をとっていることは、才ノ峪古墳群の中心埋葬がいずれも伝統的な竪穴式石室ないしは箱式石棺であることと対称的であり、その対比は新旧二要素の対立を包みこんだ変動期の社会のありようを反映したものと考えることもできよう。

(注)

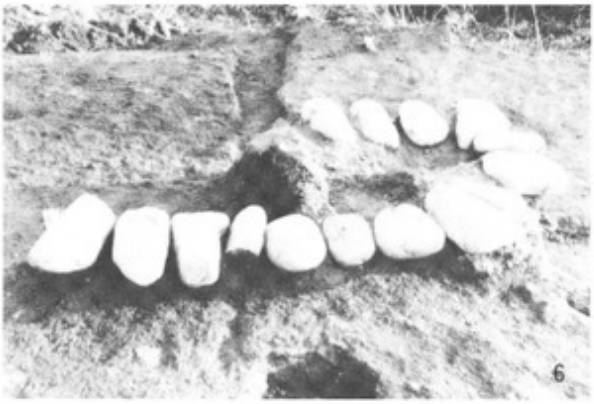
① 湊哲夫　「須恵器」『才ノ峪遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第18集　津山市教育委員会　1985年

② 田辺昭三編「陶邑古窯趾群の研究」平安学園考古クラブ　1965年

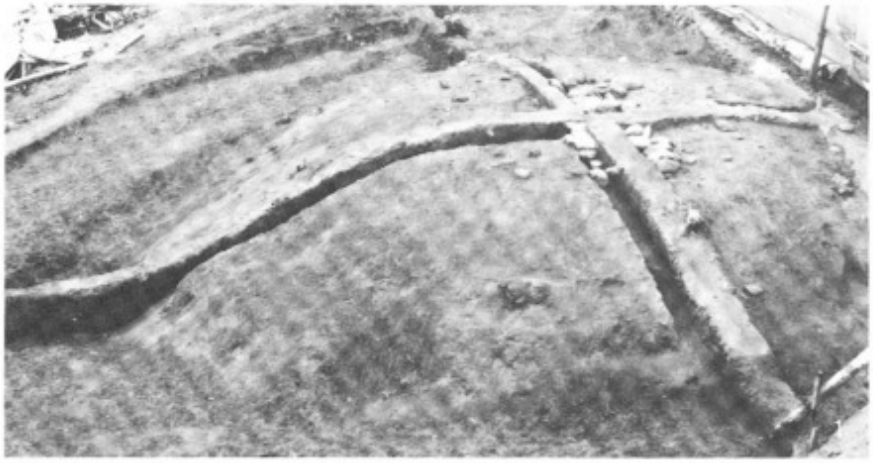
中村浩　「陶邑」Ⅲ　大阪府文化財調査報告書第30集　大阪府教育委員会　1980年
③ 川西宏幸　「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』64巻2号　1978年
④ 今井堯　「原始古代編」津山市史　津山市　1972年
⑤ 行田裕美　「日上和田古墳」津山市埋蔵文化財発掘調査報告第6集　津山市教育委員会　1981年
⑥ 近藤義郎　「佐良山古墳群の研究」　津山市　1952年
⑦ 今井堯　「原始古代編」津山市史　津山市　1972年
⑧ 松本和男　「北山古墳群」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告4　岡山県教育委員会　1973年
二宮治夫

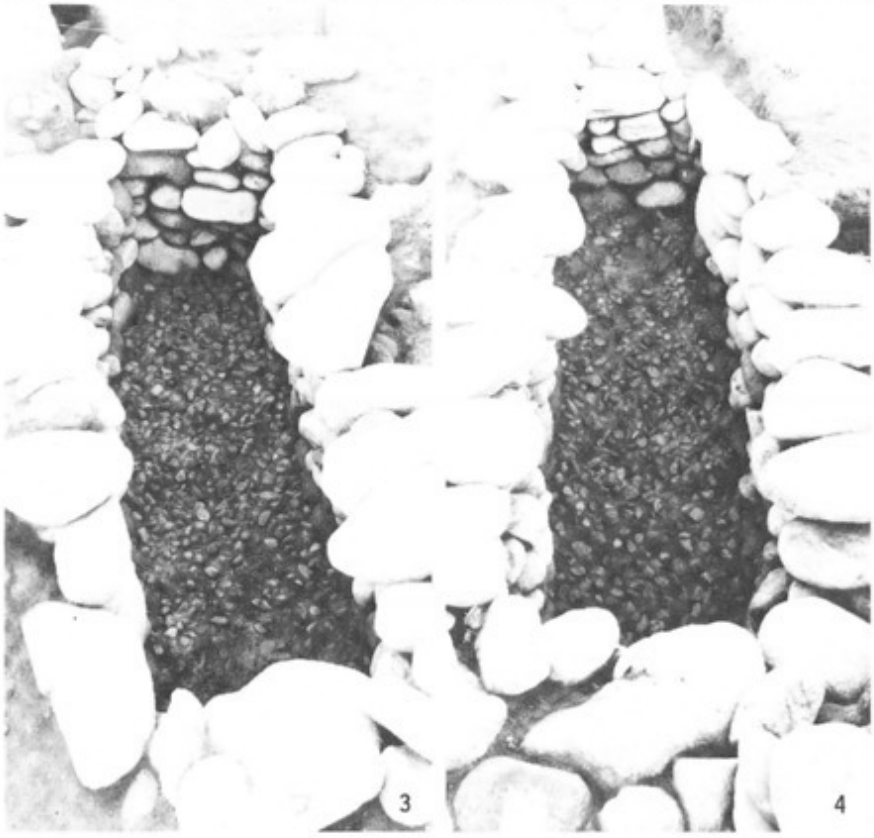


1．オノ峪古墳群遠景　2．発掘調査着手前の状況　3．重機による造成土除去作業
4．1、3号墳旧状復帰



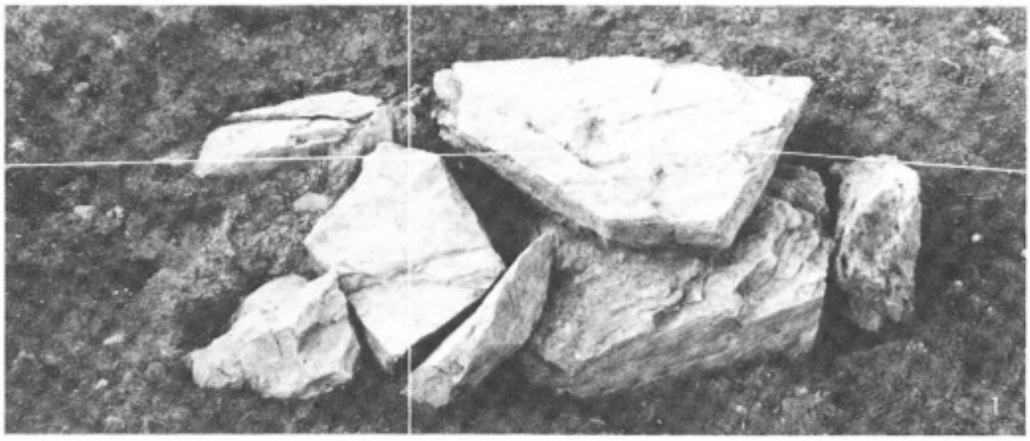
1．1号墳　2．1号墳主体石室遺存状況　3．須恵器出土状況(1)　4．須恵器出土状況(2)
5．埴輪出土状況　6．主体石室側壁基底部配列状況　7．1号墳調査終了

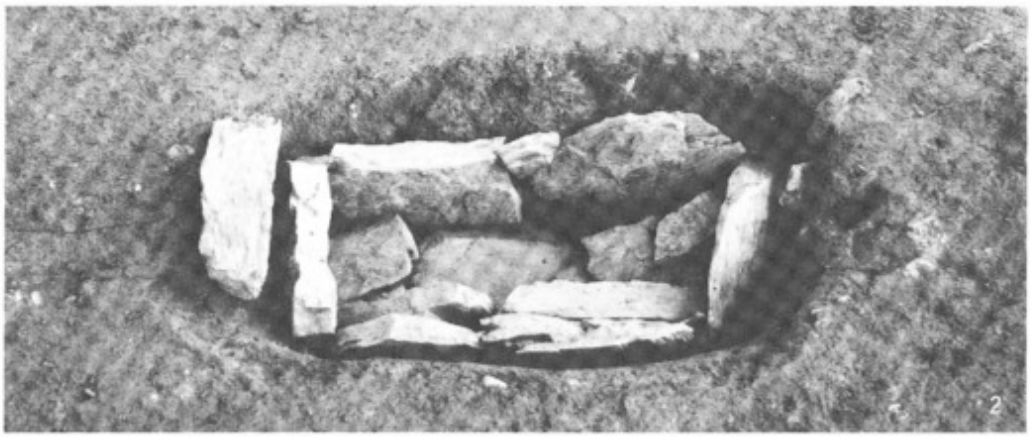


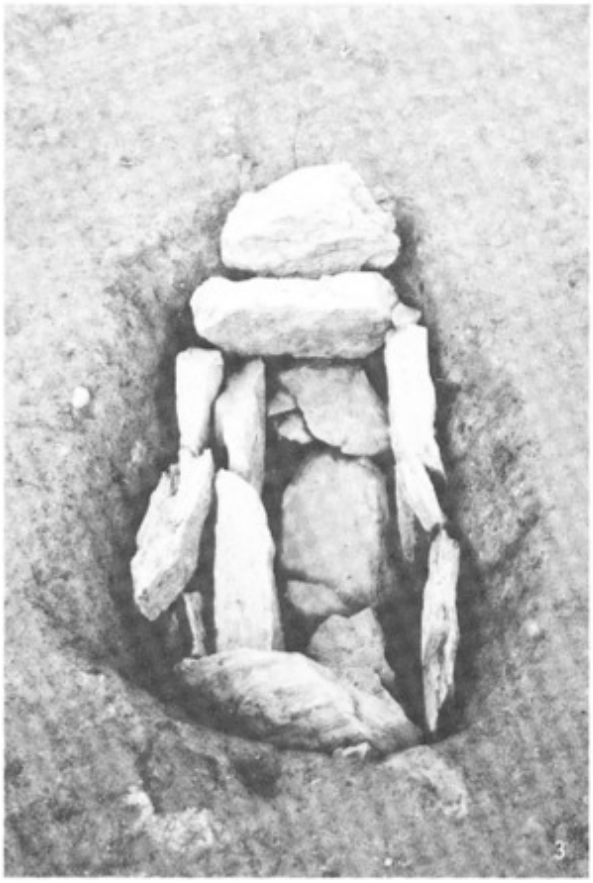


1．3号墳　2．3号墳主体石室遺存状況　3．石室(1)　4．石室(2)

1．3号墳石室側壁　2．石室部土層切断面　3．墳丘切断面　4．側壁構築状況
5．主体石室側壁基底部配列状況　6．3号墳調査終了

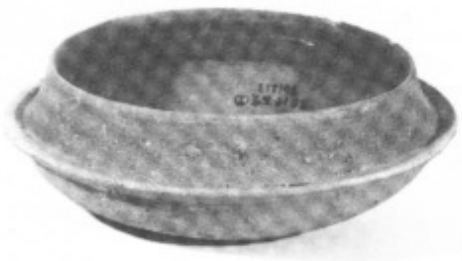


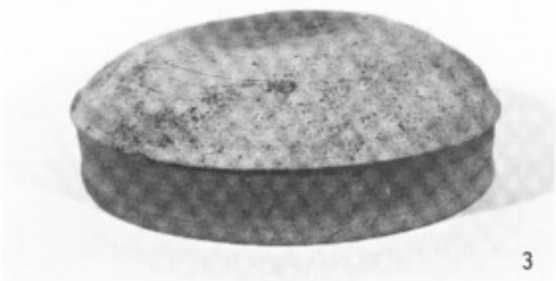




1．3号墳箱式石棺検出状況　2．3．箱式石棺天井石除去後　4．箱式石棺掘り方

1


2


3

4

5

6

7

8

9

10

1～6．1号墳石室内出土須恵器（上から、Fig. 11—5、6、7、8、3、4）
7．3号墳南東部出土須恵器杯（Fig. 11—9）
8．9．3号墳出土須恵器壺（Fig. 11—1）
10．3号墳石室床面出土小玉（Fig. 14）

1

6

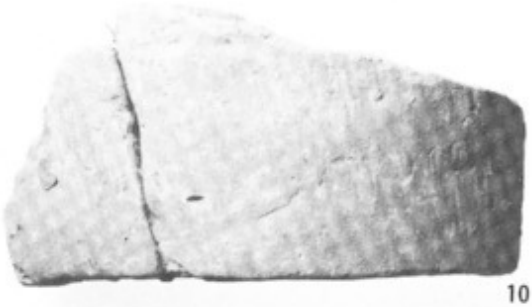
2

7

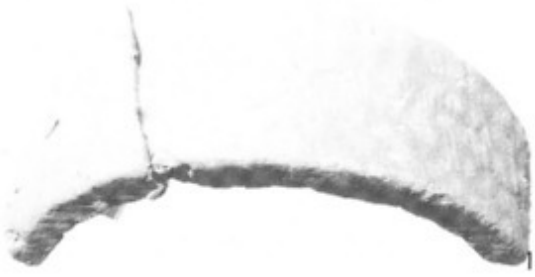
8

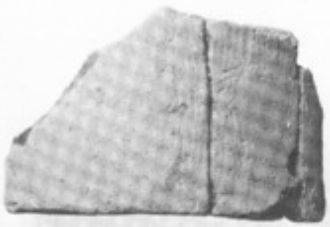
9

3


10

4


11


5

1号墳出土埴輪
1．2、3、10、11（Fig. 12—13）
4．(Fig. 12—11)
5．(Fig. 12—14)
6．(Fig. 12—5)
7．(Fig. 13—19)
8．(Fig. 12—9)

才ノ峪古墳群

津山市埋蔵文化財発掘調査報告第23集

１９８８年３月３１日

発　行　　津山市教育委員会
　　岡山県津山市山北５２０

印　刷　　廣陽本社
　　岡山県津山市田町２２